

# 小學校入學檢定を終へて (二)

附屬小學校主事

堀

七

藏

一

毎年の行事であるから入學檢定を終へても特別な所感がある譯ではない。しかし入學檢定に於て、いろ／＼の現象があり、それからいづく感想は幾分幼稚園保育の参考にもなるかを考へる。そこで編輯者の求に應じ、漫談的なるかも知れないが、入學檢定前後の所感を羅列する。尤も幼稚園保育の参考をならす、却て自己反省をしなければならぬ破目に陥るかも知れない。

## 二

本年の入學履歴書の受付は、一月九日午前九時よりいふこみになつてゐた。當日私は授業の關係で、八時に出勤する。もう小學校の玄關受付の所に十人あまり列をなしてゐる。「氣の早い人も多いな、この寒いのにお氣の毒な」を、考へて主事室に入り、授業に必要な準備をなし、本校の方に行く積りで、小學校の玄關に出る。履歴書提出のために待合せてゐた中の二人が、大變に立腹してゐるらしい。「私達は寒いのにこゝに待つてゐる。それに後から来たものを廊下に入れて貰ひました」をいふ辯明である。そこで私は「寒いでせうから到着順に廊下におならびになつた方がよいでせう。まだ一時間も受付開始まで時間がありませんから」をいつたが、それでも「此處に並び書き出してゐるではないか」をなほぶつ／＼

憤慨してゐる者があつた。授業の時刻におくれるから、その儘にして本校の方に出掛けた。

授業を十分位早く切上げて、小學校に來て見るに、百人ばかりの人達が廊下に列をなしてゐる。そこで先頭の方に行き、

「先刻、順序で文句のあつた方は前の方にお出でなさい」といつたが、今度は皆頭を下げて居られる。私も不平者の詮議をする必要がないから、その儘にして置いたが、その中の一人（よく見れば附屬高等女學校專攻科の講師をしてゐたことのある方）が「一番に來た方からかはつて呉れよ、いはれましたから私がかかりました。私は急ぎますので一番に受付けて頂きます」といふことである。それは勝手に、私共には何等の關係のないことですから、「結構でせう」と、その儘にして置いた。

妙なもので永年間數十回の經驗によるに、抽籤で一番最初にひいた人で當り籤をひいた者がない。確率の問題を八ヶ間しく研究すればさうなるか、これは六ヶしい問題である。今年の入學志願者數、第一部が四百三十三人、第二部が三百七十七人、第三部が三百二十七人であつた。これは女兒だけであるが、この女兒について、第一部は一番より七十番までを入學候補者と定めて檢定をなすことになつてゐる。この第一部の抽籤に於て第一番に抽籤する人では幸運の確率が四百三十三分の七十である。しかし第二番に抽籤する人からは確率が變化する。若し第一番の抽籤者が當り籤を抽出して居れば第二番の者は幸運の確率が四百三十二分の六十九、若し第一番の抽籤者が當り籤を抽出して居ないときには第二番の幸運の確率が四百三十二分の七十で、第一の抽籤者よりも確率が大きい。第三、第四に抽籤する者の幸運の確率はいろいろに變化する譯で、必ずしも第一、第二の抽籤者よりも幸運の確率が小さい譯ではない。しかし普通に考へると、早く抽籤する程、當り籤が多いからよい。即ち幸運の確率が大きい。七十番までの抽籤者が全部當り籤を抽出してしまへば、七十番目から抽籤する人々には幸運の確率が零であるを考へられ易い。それで寒いのに争つて、一の一番に受付票をとりたいといふ念願になる。

今年も午前六時頃から氣の早い人は、入學履歴書をもつて來たので、宿直の小使が困つたのである。ところが實際抽籤して見るに、受付番號一番から十三番までは、當り籤がない。十四番と十六番に當り籤があつて、二十三番までさぶ。それで受付番號百番までに當り籤が十二、受付番號二百番までには十六、受付番號三百番までに十八、受付番號四百番までに十五、受付番號四百一番より四百三十三番までに七である。だがまた二つあこに残つたことになる。それで當り籤は六十八抽出され是を見て先を争つて朝早くから押かけなくともよい。また第二部の方では、當り籤が受付番號四番に一つ現はれたのであるが、三十五番まではズット現はれてゐない。そして百番までに十六、二百番までに十、驚くべきことには百四十七番から二百三十七番まで一つも當り籤が出てゐない。そして三百番までに十一、三百十七番までに三つ現はれてゐる。

そして十の當り籤が残つた。第三部では、受付番號五番に當り籤が出て、百番までに十一、二百番までに十四、三百番までに二十二、三百二十七番までに三つ出てゐる。従つて第二部では残つた中に當り籤が十、第三部では十ある譯で、最後に抽籤しても幸運の確率が十分にある譯である。要するに急いで履歴書を差出さねばならぬ譯でもなく、またおそくなつたから悲觀することも不要である。

### 三

抽籤によつて入學候補者を定める。第一部では二十人の入學者に對しては一番から七十番までの抽籤番號に當つたものを入學候補者として檢し、第二部では十二名の入學者に對し、一番から五十番まで、第三部では入學者十五人に對し、一番から七十番までを入學候補者として檢定することにした。しかし實際には第一部でも抽籤に缺席した爲め無効になつたものが二人あり、第二部では第一部の抽籤に當つた爲めに第二部が無効になつたものが多く、第三部また同様である。第

一部も第二部も當り籤、また第一部も第三部、第二部も第三部も當り籤といふ工合に重複したものがあつたことを豫想して、第二部では五十番まで、第三部では七十番までをなした譯である。實際に於て第一部は六十八人、第二部では三十人、第三部では五十三人検定することになつた。尤もこの外に第二部第三部に對し附屬幼稚園第二部よりの者十六人が検定を受ける譯である。故に女兒の検定を受けるものは百六十八人である。一體小學校の入學検定をなすには、第一に、入學志願者全體を検定して入學者を決定するか、また第二に入學志願者全體につき検定して入學候補者を決定し、それにつき抽籤によつて入學者を決定するか、第三に志願者全體を抽籤によつて入學候補者を定めそれを検定するか三法ある。第一の法によるは、志願者全體につき検定を行つて入學者を決定するのであるから、優秀兒童を選択して入學させるには最もよい。しかし二十人の入學者に對し、四百三十三人の志願者ある場合に於て、この法を適用することは頗る困難である。四百三十三人を検定するには少くとも四日を要する。四日間同一の検定問題を以て口頭で試問すること、そこに不公平が起る。第一日の模様を保姆や父兄の人々が幼兒から聽いて、その次の日には、それで準備をして來るといふやうな現象が起ることを豫想せねばならぬ。さりとて毎日問題を異にするときは、第一日の成績と第二日の成績を比較するに多少の不都合がある。しかも滿六歳になるか、ならぬの幼兒四百三十人に嚴密な検定をなすことが頗る困難である事も否定出來ない。第二法に於ても全體を検定して入學候補者を定め、それから抽籤で入學者を決定するのであるが、全體を検定する長所と短所とは略々第一法と同様である。唯検定して置いて、検定だけで決定出來ぬから抽籤を適用するだけである。

そして第一法でも第二法でも入學検定で駄目になつたといふことは、親の方では心外であるといふ感じも起る。折角檢定で合格してゐる抽籤で落されたといふのも残念であるといふ小言も出る。それで第一法も第二法も勞多くして左程の效がない。寧ろ第三法の抽籤によつて入學候補者を定め、後檢定によつて入學者を決定する方がよい。この方針が當附屬小

學校で、三十年來より來つた入學檢定の方法である。尤もこの法に對し、次の如き非難をする人がある。

(1) 四百三十人もの志願者があるのに、抽籤で省けばよい兒童が得られないといふこと。これは止むを得ないことで、多くの兒童を檢定するよりも、一日で檢定出来る數の方がよい。

(2) 抽籤の如き器械的な方法で入學候補者を決定するのは非教育的であるといふこと。これも止むを得ない。小學校の卒業者を入學させる中等學校などで、抽籤法によつて入學者を決定するときは非教育的である。しかし小學校入學の兒童の如き檢定の方法が完全でない場合には、抽籤によることは最も公平である。多少非教育的であるといふ譏があつてもそれは止むを得ない。

(3) 抽籤で駄目になることは誠に忍びないといふこと。これは考へ方である。抽籤で駄目になつたから諦め易いといふ人も多い。檢定で駄目にすれば、子供の優劣を比較したことになるが、抽籤だき運命を諦めるには都合がよいといふ人もある。檢定で不合格になつたのき、抽籤で駄目になつたのき、され程氣持が異なるか、統計をみるこきも出來ず、また統計したこきもないから、明白にさちらがよいと斷言出來ない。兎に角當附屬小學校では抽籤によつて入學候補者を決定した後、檢定を行ふこきになつてゐる。それで「抽籤に當つたから、もう入學出來たやうに思つてゐましたが、檢定で入學出來ないこきは残念でたまりません」と、不平を並べる人が多いのは誠に困る。しかし全體を檢定したこきよりも、檢定者を恨む方が少いこきを考へるこき、せめてもの慰安である。實に慰安にならぬこきを、慰安させねばならぬ檢定者の心事も同情して頂きたい。それならば、檢定を全廢して抽籤だけにしたらさうかこきも考へられるが、これも實行出來ない。抽籤だけならばぎんなものが志願しないこきも限らぬ。遺傳性微毒で口蓋が缺けてゐる兒童が抽籤に當つて入學候補者となり檢定を受けた實例さへある。(つゞく)